

「『障害ある長女を殺害 容疑の母逮捕』の報道に接して」へのコメント

HP 記載の標記の記事に、早速以下のコメントをいただきました。

参考までにお目通しいただければ、幸いです。

2006. 5. 18.

阿部幸泰

①HP, 読ませていただきました。

制度が整っても、人の意識が変わらないことには、何も始まらないということでしょうか。

その人の意識の変革が一番難しく、人間としての課題とも思えました。

すごい大きな課題なだぁ〜と率直に思います。

でも、少しずつでも、目の前の人だけでも、何かを伝えることが明日につながる・・・と信じないと・・・ですかね。

障害の有無なしにかかわらず、親の「育ち直し」の必要性を感じます。

そういう私はこの仕事を選び、子どもにたくさんのことを教わりました。

そして、親からも学ばせて頂きました。

だから、今の自分がある！そう思うと、感謝ですね。

①への私の返信

究極的には、福祉は意識改革であり、社会改革ということだと思います。

自分は若い頃、「この仕事をするのであれば、精神革命を起こすぐらいの気持ちでやれ！」とか、「世の中の価値観を変えるつもりでやれ！」と指導されました。

ですから、福祉に携わる方は、そうした大きな意味が自分にあることに気づいて欲しいです。

それなのに、最近は福祉流行りで、単に給与を得るためと思っている人が多いですよ。

また、親御さんにも、障害のある我が子を育てるということは、究極的には単に我が子を育てるだけでなく、社会の価値観を変えることに寄与する側面のあることも自覚して欲しいというのが、自分の願いです。

そのためには、我が子の生存権をまず認めることから、全てが出発すると思います。

②入所して、たまたま帰省中での出来事～

原因はわかりませんが、母親の年齢からして更年期うつ(?)のような気がします。

自立支援法になって利用負担増になった事も引き金の一因かもしれません。

それとも施設で何かあったのでしょうか。

親同士のつながりでも、そういう気持ちの動きの察知はむずかしいのでしょうかね。

②への私の返信

色々複合的に重なったの事だと思いますので、この事例の原因を詮索するつもりはありませんし、母親を責めるつもりもありません。

それをしたところで、娘さんが生き返る訳でもありませんしね。

ただ、こうした事件があると、「二度と起こらないように」という観点から、記事を書きました。

親御さんの一部には、「施設さえあれば安心」と今も思っている方は少なくないです。

もちろん、社会福祉システムとして、最後の受け皿として施設の存在を否定はしません。

子どもを施設に入所させるだけで、そこでの処遇に対して、子どもの目線から施設、職員をチェックするという親の立場を放棄している親御さんが多いように思います。

そうしたことから、親という名のプロへの「育ち直し」が必要でないか、その支援システムを構築する必要があるのではないかの思いから記事を書いた訳で、角田の事件はその導入部分です。

もっと厳しいことを言わせていただければ、最も身近な存在の家族が、不憫という意識では、他の方々が障害児・者を疎外、差別することに反論が出来るのか、また、障害者のことを理解してくれといえるのか、ということです。

〇〇さんたちのように、本当に子どもさんのことをあれこれ考えている姿をみるからこそ、そこから社会の人々も色々教えられ、考えさせられ、次第に社会も徐々に変わっていくと思っています。

それだけに、親の我が子殺しは、どんな理由をつけようと自分は認めたくありません。

障害児問題に限らず、虐待問題、高齢者問題、緩和ケア問題、出生前診断問題、等々、全て生命の尊厳とはどういうことか、そのためにお互いどう助け合うのかという観点から、自分は見つめて行きたいと思っています。

自分を含め、今生きており、周りの方々と係わり合いながら生きて行く存在であるという、全ての人に共有、共通するこのシンプルな事実から全てを考えたいと思っています。

ですから、どんなプロであっても、この事実から説明できない人には、「何のために仕事しているの？」と自分は聞きたくなります。

案外、プロという方々も、そこから自分の仕事を位置づけ、説明できる人ってそういないです。

プロを育てるのも、親の役目の一つかなと思いますので、「プロの人のいうことだから正しいのだろう」と、鵜呑みにはしないでくださいね。

親御さんも含め、我々みんなが互いに係わり合いながら「生きるとはどういうことか」を自らに問い続けることが必要な気がします。

これからも、親の立場から、我々が検証しなくてはならないことを、お聞かせください。

③親が「不憫と思った」娘の姿とはどのようなことだったのだろうか、この事件も裁判所は情状酌量の余地ありと判断するのだろうか、私なら許せないな、などと新聞記事を見ながら思っていました。

④よく「可愛そうに・・・」と言われる事があります。

それは、優しい気持ちからなのですが、やはり言われると反発したくなります。

「可愛そうなのでなくて、不便なだけです」と。

でも、その不便を解消できないのなら、かわいそうなのかもしれません。

しょうがい重いから、リハビリの効果が大きく期待できるお子さんが優先される。

もう動けないのだから、しなくてもいい。話しかけてもわからないから、話しかけない。

そういう事も多かったひと昔、ふた昔のお話ですが・・・とても残念でした。

今でも、子供に良い環境で、近くの幼稚園に入れたい、学校に通わせたい、施設に通いたい～と親は一生懸命にならざるを得ないし、その反面～普通の生活にも憧れます。

親がこけたら子もこけた・・・にならない為に、福祉制度をめいっぱい活用していますが、今の息子の生活は、親が元気であるから成り立っている危ういものです。

親がこけたら～今は入所でしょうか。

④への私の返信

> よく「可愛そうに・・・」と言われる事があります。やはり言われると反発したくなります。

そうですね。

授業で障害児関係のビデオを見せる時、「可哀想とか、気の毒と思う自分は、何故そう思うのか、そう思う自分は何者なのかを考えながら見ること！」と、いつも話しています。

学生たちに自らを検証させる作業は、ぜひ必要と思っています。

> 親がこけたら子もこけた・・・にならない為に、

障害児・者関係では、特にそうですね。

「雑学 BN」の福祉・教育・医療関係（Ⅲ）2005.09.24.「親が健康でないと、教育環境が危うくなる子どもたちと、コメント」にも記しましたが、この側面の問題は記事に触れたように、障害児・者支援策の中でブランク スペース（空白）だと思っています。

もちろん、この側面の支援策が充実したからと云って、先のような事件が皆無になるとは思っていません。

ただ、そうした社会創りの営みの雰囲気こそが、親御さんたちの「不憫」という意識を薄めて行くことに通じるのではないかとと思っています。

学校、行政機関、作業所、等々、対象の障害児・者に対しては、あれこれ支援、アドバイスをしますが、その子どもの日常の一番の支援者である母親への支援は案外蚊帳の外のような感じですね。

子どもの生存権、生活権を守るなら、まず母親の支援もひっくるめて考えてくれよ、とプロたちに云いたくなります。

最近、しきりとそのことを発信しているつもりなのですが、案外共鳴者は現れない。

具体的支援のイメージが湧かないからなのでしょうかね。

やはり、当事者である母親からの具体的な発信こそ、力になりそう。

声を大にして、行政等関係者に発信してくださいね。側面から、多いに声援します。

⑤最近の悲しい出来事（心中、殺害へのコメント等）HP記事を読ませて頂きながら、また自分の事を振り返って繋がりについて考えました。

最近つくづく思うのですが、皆さんの繋がりの中で家族が活かされているのを実感しています。

私なりに繋がりって当事者で抱え込むのではなく、信頼の中で相手に委ねられる絆の様なものと思っています。

その繋がりを実感できる様になったので、今までの自分を振り返って、考えてもいなかった事にチャレンジしたいと思える様になったのかなと、支えて頂いた皆さんとの交流を通じて頑張ってる方を自分も応援できたらと、その為に自分に何が出来るかと考えたとき当事者が抱え込まないで社会に委ねられる繋がりを作る場を作っていけたらと思う様になりました。

以前の自分なら大学に行く事やボランティア活動をするなんて想像できませんでした。

そんな事を妻とも話していて、二人でこんな事を話せる様になったのも皆さんとの出会いがきっかけだよと話していました。

先日も△△さんや○○さんからも心のこもったお便り届けて頂いたり、いつも私どもに寄り添ってくださっているのをすごく実感しています。

明石さんは「笑顔は力 人は財産」と良く言われますが、本当に私達にとってもそうです。

皆さんにプレゼントして頂いた「想い」をこれからも家族で育てていきたいです。

そして、私達だけでなくこうした繋がりがたくさん広がっていけば、ありのまま繋がり輝けるのにとつくづく思います。

そんな想いもあって、また送って頂いた本も以前とは違う気持ちで読み始めました。

⑤への私の返信

同じ宮城県内の事件だけに、メル友等からも家族背景などの詳しい情報も入ってきます。
予想通り色々な要因が重なってはいるようです。

でも、所詮そんなことが分かって、今更、詮無いこと。

周りの事情がどうであれ、当事者の生命の尊厳を根源として考えて行く社会であって欲しいので、子どもたちの目線から、自分も含め社会のあり方を検証し続け、HP等で発信して行くつもりです。

> 皆さんにプレゼントして頂いた「想い」をこれからも家族で育てていきたいです

いえいえ、私たちもご家族のみなさんのお心から、素敵なプレゼントをたくさんいただいています。

こうして、お互いに助け合っていることを心で実感できる程、嬉しく、素敵なことはないですね。これからも、よろしくお付き合いください。

⑥ HP 見せていただきました。

障害児を抱えた親の苦悩は測り知れません。

介護していようと、施設にお世話になろうが同じだと思います。

もし自分だったらと考えました。人生は選べませんよね。与えられたものと覚悟して生きていくと思います。

仲間をいっぱい増やしコミュニケーションをとりながら視野広くやります。

親が希望をなくしたら子は悲惨です。

子供の大切な命、どんな理由があれ親の物ではありません。命を奪うなんて絶対あってはならないことです。

そのためにも、地域の温かいバックアップが不可欠ですね。

命の尊厳、よく考えてみたいとおもいます。

⑦私のような凡人は愚直に生きるべきと思ってます（大まじめ）。

でも、お金の使い方にしろ、モラルにしろ、人に対して恥じるような人間ではありたく

ないので。

障害児産んで恥ずかしいと思う気持ちがあるから余計、負けたくないのかな。色んなものに。

先生の常に仰る「生命現象」は私もよくわかります。

理系の主人によると、自然界でも動物などの100体中1体の奇形発生率なのだそう。

私が良く思い起こすのは夏目漱石の小説の一節（どれだったかは忘れまして^^;）。

「生きることは死という井戸の淵をぐるぐると歩いているような危うさで存在している」といったような文章でした。卒園式の謝辞でもこの一節を引用しました。

障害は、中途であれ生まれつきであれ、偶然に過ぎない。誰にでも起こりうること。なんら恥じることなく、しっかりと前を見て、親が自分の人生を充実させようとするのが、子供の命を輝かせることにつながると思います。と。

だから、「もっと親を笑わせて下さいね」っていうのが主旨だったんだけど（^0^）

理論的には理解できるし、いくらでも言葉にできるんですが、そんなもので全てを乗り越えられるのなら生きることはもっとずっと楽ですね。

いつぞやの「受容への過程」の話にもどっちゃいますが、自分を客観的に見つめるとき、他人の目（自分にとっては嫌いな他人の）になる・・・ことってありますよね。そういう時は記憶・感情がフラッシュバックするんだと思います。するとどうしても落ち込みます。

落ち込みが持続しない（ここでも飽きっぽいのかしら？）のは私の長所なので、有り難いのですが。

その「記憶・感情」は、忘れることはないと思います。経験だから。

持続的に引きずっているわけではないですけどね。

でも、それも私なんです。「乗り越えられない」というより、「消去」できない記憶や感情を持っている私。それを認めてあげるということが、もしかして「受容」という状態なのかもしれませんが。いいじゃん。たまに泣いたり、落ち込んだり。

それって、きっと、私を含めた家族を支えるのにすごく必要なんだよ・・・と、自分に話しかける私で～す。（*^_^*）

先生が私たち母親に対して感じている「たいしたことじゃないのに」は、私も、離婚した友達に対して良く感じます。

自分が思っているほど、他人はインモラルな感情で責めたりしていないし、堂々としてればいいじゃん、って思うんですけどね。

本人達にとっては私の軽口も気に障るらしく「冗談のネタにするなーっ」て、叱られてます< (>__<) > わはは。言われても懲りない私。でも、それでも友達で居てくれるって事は・・・と、ますますつけあがる私! ?

⑦への私の返信

今の〇〇さんでも、やはりそうした気持ちが残っているのですか？

すっかりとまで云いませんが、もうかなり解放されているのかなと思っていました。

人類に出産がある限り、生命現象としてはあり得ること。

ですから、障害児も存在することは生命現象の前では普通のことだけに、母親がどうのこうのという問題でない、だから障害児が存在することが普通の社会と考えるように！と、授業で学生にコンコンと語りかけています。

だって、近い将来、結婚して親になるであろう学生たちですものね。

そうした状況に遭遇した時、少しでも気持ちを楽しんでくれればと願う、僕の切なる思いからです。

母親、家族が元気でないと、子どもも元気をもらえませんよね。

もちろん、母親が元気に子育てできるように、社会として支援することも、また当然のこと。

そうした社会を創って行こう！とも学生に語りかけます。

ですから、科目名に関係なく、生命現象の授業には、十分に時間を割いています。

「受容への過程」の時も触れましたが、僕は親の心情は層をなしていると思いますので、「乗り越える」ということではないと思っています。

ですから、「そういう時は記憶・感情がフラッシュバックするんだと思います。するとどうしても落ち込みます。」ということもあって当然かと思っています。

あなたが「落ち込みが持続しない」と表現しているように、できるだけそうした時間が

少なくなって欲しいし、そのためには、周りはどう支援するかを考えなくてはと思っています。

「人間は感情をもつ動物」であると同時に、「考える葦」でもあります。

やはり、そうした状況になったその時の感情をどうコントロールするかも、一方で準備する思考も大事かなと思い、学生に語りかけているつもりです。

「人、それぞれの感情があるのだから……」だけをすっかり認めてしまうと、周りは何にも云えなくなります。

だって、当人の感情の問題は、その折々の当人が感じる心情風景ですものね。その折に、周りが「そう感じるな」なんて、云えっこないです。感情はあくまで個性ですよ。

感情をもつ動物であることを認めつつも、人間関係（社会）の中でどう共に生きるかは、考える葦の部分。

だからといって、直ぐに周りはいれこれ感情に踏み込んであれこれいふべきでないと思います。

あなたの云うように、「いいじゃん。たまに泣いたり、落ち込んだり。」というような感情の折には、まずは周りが寄り添い、「受容」することは云うまでもありません。

まあ、これもあなたに言わせれば、ひょっとすると、「阿部さんの単なる理論で、屁理屈」ということになるのかな（笑）。